

令和 5 年 6 月 27 日現在

機関番号：32685

研究種目：若手研究

研究期間：2019～2022

課題番号：19K13133

研究課題名（和文）グリム童話およびヨーロッパの民間伝承における五感に関する描写とメディア

研究課題名（英文）Brothers Grimm's Fairy Tales Across Different Media: A Study on Depictions of the Five Senses and European Folklore

研究代表者

鶴田 涼子（TSURUTA, Ryoko）

明星大学・教育学部・准教授

研究者番号：10567001

交付決定額（研究期間全体）：（直接経費） 1,100,000 円

研究成果の概要（和文）：本研究は『グリム童話』等のドイツ語圏及びヨーロッパの民間伝承において、五感に関連する表現技法がどのように取り入れられているかを検証したものである。19世紀初頭、グリム兄弟によって口頭伝承が書きとめられ、民話の受容の仕方が大きく変化した。語り部の声による伝承が、文字による「民話／作品」へと変化したとき、文字化の過程で失われた聴覚への働きかけは文字化された民話の内部にどのような痕跡を残しているか、という問いを立て、声の文化と文字の文化の違いが人間の感情表現及び感情の描出方法にもたらす影響を考察した。民話では、特に聴覚に関わる描写が、登場人物が置かれた状況の転換に効果的に機能していると考えられる。

研究成果の学術的意義や社会的意義

本研究は、ドイツの『グリム童話』を中心に各地の類話や隣国のアンデルセンの作品等を考察対象とした。口頭の「語り」で伝えられる情報は、五感に関連する描写によって民話に取り込むことが可能であり、音や声、歌という聴覚的な場面の活用は口承性を再現する働きを担う。発展的な課題として、口承の民話を対象とし、語り／黙読／音読の効果を脳科学的に測定する研究に繋がるため、学術的に開拓されていくべき分野であると考えられる。また民話の表現形式として総合芸術の人形劇がある。本研究の成果は、民話研究に限らず、世界で古来から継承される人形劇、例えば日本の人形浄瑠璃における表現手法について考察をおこなう際にも応用可能である。

研究成果の概要（英文）：In the early 19th century, traditional oral folk tales were written down by Brothers Grimm, which dramatically changed the way that folktales were disseminated and consumed. However, what traces of voice remain in folktales replaced by text? This study examines that how expressive techniques related to the five senses are used in "Grimm's Fairy Tales" and European folklore. This paper examines the effects of narrative and written tales on emotional expression. The results suggest that scenes related to auditory perception change the character's situation. In addition, they show that the most effective way to describe a change in a character's situation is through auditory perception.

研究分野：ヨーロッパ文学

キーワード：民間伝承 ドイツ語圏文学 ヨーロッパ 比較文化 五感 グリム兄弟

## 1. 研究開始当初の背景

(1)本研究は、『グリム童話』(初版,第1巻 1812年,第2巻 1815年)等のドイツ語圏及びヨーロッパの民間伝承において、五感に関連する表現技法がどのように取り入れられているかを検証するものである。本研究の着想は、語り部の声による伝承が、文字による「民話/作品」へと変化したとき、文字化の過程で失われた聴覚への働きかけが文字化された民話の内部にどのような痕跡を残しうるか、という点に疑問を抱いたことにある。19世紀初頭にグリム兄弟によって口頭伝承が書きとめられたことにより、民話の受容の仕方が大きく変化した。そこで、民話への影響を知る必要があると考えた。『グリム童話』は民間伝承であり、書承由来の話もあるがその多くは口承によるもので、本来は「語り」によって直接的に伝承されるものであった。このことから、声の文化と文字の文化の違いが人間の感情表現及び感情の描出方法にいかなる差異をもたらすものであるかを考察することを目指した。

(2)本考察は同時に、グリム兄弟が民間伝承の文字化というものをどのように捉えていたのか、また改編において、「口承性」を活かす試みをいかにこなっていたのか、という点を分析することに繋がると考える。

## 2. 研究の目的

(1)本研究の目的は『グリム童話』等のドイツ語圏及びヨーロッパの民間伝承において、五感に関連する表現技法がどのように取り入れられているかを検証することである。『グリム童話』は口頭で伝承された話が多く、各地に類話が存在する。19世紀初頭に、グリム兄弟によって口頭伝承が文字で書きとめられたことにより、「語り部」の声を聞き、話の内部の世界を「聞き手」が想像するという行為は、「個人」の「読書」行為(音読/黙読)へと変化した。このような変化の中で、文字化の過程で失われた聴覚への働きかけが、文字化された民話の内部にどのような痕跡を残しているかを検証し、声の文化と文字の文化の違いが人間の感情表現及び感情の描出方法にどのような違いをもたらすものであるかを明らかにすることを本研究の目的とした。

## 3. 研究の方法

(1)民話は本来口頭伝承であるため、聴覚優位の芸術であると仮定する。文字文化の誕生を人類史の転換点と位置づけ、聴覚に係わる描写が民話のなかでどのような働きを担っているかを分析する。口承から文字へ移された文章内から五感に関する描写を抽出し、『グリム童話』の版ごとの変遷を検証する。五感に関する描写を中心に、類話との比較検討を通してグリム兄弟による改編の傾向を考察する。

(2)また民話や民話をもとにした作品は多様なメディアを介して新たにどのような表現方法を獲得しているかを問い、再話の可能性を考察する。「グリム童話およびヨーロッパの民間伝承における五感に関する描写」をテーマに、諸芸術の交錯という観点から民間伝承が人形劇等においてどのように脚色されているか、また感情表現の方法について国内外で調査を行い、多様な表現/表象が生じうる理由とその意義を考察する。

## 4. 研究成果

(1)本研究の出発点は、『ドイツ伝説集』(1816-1818年)における植物の声の効果に疑問を抱いたことにある。伝説内で登場する人の形の根をもつ植物は、その奇妙な形から人格を付与されることも少なくない。伝説では、植物の声を聞いた者は命を奪われると伝えられる。植物の声を聞くことがなぜ聞いた者の死に繋がるのか?という疑問を持ち、そこから民間伝承における聴覚的な場面の役割に関心を抱くようになった。ヨハン・ゴットフリート・ヘルダーによれば聴覚は、他の感覚と感覚を結び付ける役割を果たす重要な位置を占める。同時代には感覚器官についての優劣生もまた論じられていたため、民間伝承における五感に関する描写とその意義を考察し、民話の改編過程との影響関係を明らかにすることをひとつの目的とした。本来、口頭で伝承される民話には聴覚への刺激がきっかけとなって、話の筋が展開していくケースが散見するため、五感のうち聴覚は民間伝承において最も重要な感覚であると考えられる。このような背景から特に登場人物の声や歌、動物の声、音に着目することとした。

2019年度は主に『グリム兄弟によって蒐集された子どもと家庭のためのメルヒェン集』(以下『グリム童話』と記す)とその類話における声や音に関する描写を確認し、それらの役割および聴覚に関する表現技法の違いを比較検討した。また関係資料の収集と文献の整理を実施した。2019年8月末から9月初旬に、ドイツのマールブルク、カッセル、ベルリンを中心に調査と資料収集を実施した。現地調査により、『グリム童話』に関する現代社会への応用の仕方について知見を得ることができたため、次に訪問すべき施設が明確となった。またオランダのライデン大学植物園にて、民話に登場する植物の生態について聞き取り調査を実施し、植物の枝葉等の形や匂い、諸特徴について観察した。またオランダの民話における動植物の描写の由来を考察した。

2019年12月に比較民俗学会主催の研究発表会に参加した際、口承文藝研究の視点に関して、

研究発表会で得られた「メルヒェンという枠組みの発明」という見解は、自身の研究において意識の転換点となった。これにより、主にヨーロッパで発表されてきた民話理論の整理および再構築の意義を再認識し、概念の理解について改めて精査する必要性を感じた。そのため、民話そのものの分析に加えて、口承文藝研究の理論の見直しと見解の整理を実施していくこととした。

(2) 2020 年度は主に『グリム童話』とその類話、伝承地域の歴史、地理に関する資料収集をおこなった。比較検討している『グリム童話』の「水呑み百姓」やオランダの民話には、古来より流布する原形が存在することが判明した。その過程で、民間伝承と創作文芸の間に位置する文芸もまた、表現技法を分析する際に必要であるという考えに至ったため、関連分野の資料の補充を進めた。

2020 年度は民話が伝承される地域への現地調査を実施することはできなかったが、日本国内にて資料収集をおこなうとともに、昨年度の現地調査により得られた資料、データをもとに民話に用いられる植物および動物の特性について分析を進めた。国内外でおこなわれたシンポジウム、研究発表会にオンラインで参加したが、2020 年 12 月に参加を予定していた研究発表会が Covid19 感染拡大の影響から中止となり、発表および研究者間で意見交換をおこなう機会が減った。しかし口承文藝研究の歴史における「メルヒェンという枠組みの発明」という見解をもとに民話理論の整理を進めた。

(3) 2021 年度は、ウニボス型のメルヒェンに焦点を絞って考察した。2021 年度は『グリム童話』とその類話、伝承地域の新聞記事、伝承の源流とされる物語の資料を中心に収集をおこなった。着目している民話の最古の類話はドイツ語圏のものではないため、原典および伝承過程の内容を理解するために複数の言語を知る必要があり、語学書や辞書を参照した。並行して「シンデレラ」の伝播と類話の比較検討を実施した。

これまでの研究活動では文字化された口頭伝承を軸に考察をおこなってきた。しかし、『グリム童話』には文献から採話された話もある。そのため、2021 年度はこうした例における描写の変更箇所について、五感に関わる場面を抽出して分析を進めた。2021 年度は 2020 年度に続き民話が伝承される地域への現地調査を実施することはできなかった。それゆえに可能な限りデジタルアーカイブを活用し資料を閲覧した。感染症蔓延の長期化にともない、日本国内の移動も減らすようにつとめ、図書館での相互貸借、複写依頼を用いた。得られた資料は、収集を予定していた資料と比較すると十分ではないものの、想定とことなる視点をもたらず文献を知るに至ったことを考えると、視野の拡張をもたらずのものであった。国内外でおこなわれたシンポジウム、研究発表会にオンラインで参加した。開催中止となった研究発表会もあり、意見交換の機会は減少したが、会報にて各研究の動向を把握した。

(4) 2022 年度は、『グリム童話』の「ラプンツェル」とその類話に照準を合わせて研究をおこなった。最終年度である 2022 年度は、主に民話の由来と類話との比較、改編による加筆修正をとおして、グリム兄弟による変更箇所について分析し、その背景について研究を進めた。今回取り上げた「ラプンツェル」の話では、フランス、イタリアの類話を比較対象に含めた。これにより、『グリム童話』の「ラプンツェル」では、改編過程で視覚から聴覚を中心とした描写方法へと移行変わっていることを明らかにすることができた。

本研究は『グリム童話』等のドイツ語圏及びヨーロッパの民間伝承において、五感に関連する表現技法がどのように取り入れられているかを検証するものであり、語り部の声による伝承が、文字による「民話 / 作品」へと変化したとき、文字化の過程で失われた聴覚への働きかけは文字化された民話の内部にどのような痕跡を残しうるか、という問いを検証しようとするものである。また同時に、声の文化と文字の文化の違いが人間の感情表現及び感情の描出方法にもたらす差異を考察するという目的もある。そのため 2022 年度は、民話をもとにした作品や伝承劇、人形劇、またヨーロッパの民話に限定せず日本の古典芸能である人形浄瑠璃における感情描出の手法へ調査対象を拡大した。実地調査としてドイツ等を訪問し、伝承劇、人形劇の調査および資料収集をおこなった。伝承劇では、身体的な表現、身振り、表情、声の使い方にも多様性があるのみでなく、決められた台詞に加えて、観ている者、聴いている者を意識した即興も見受けられ、この点で口頭伝承の特徴と共通することが強く認識された。

(5) 本研究の全体の研究期間をとおして、とくに民間伝承や民話に由来する作品における五感に関する描写に注目してきた。その背景には、民話は本来、口承であるために、文字化された際に口承性の特徴がどこかに残されているであろうという仮説と、口承であれば伝えられる直接的な情報を文字の中に組み込む必要があったのではないかという推測がある。本研究では、『グリム童話』の改編過程で視覚的な場面が削除され、聴覚に関わる描写のみ残されている箇所を確認することができた。ただこうした変更が改編の全体的な傾向であるかは今後の調査と考察によって明らかにする必要がある。考察の成果について、比較民俗学会にて口頭発表し、着想の由来に関する質問や、聴覚的效果に着目することに関して意見交換をおこなった。

『グリム童話』の「ラプンツェル」は映画化もされているように国内外で知られた民話である。「髪長姫」と呼ばれることもあり、先行研究では視覚的な描写が強調される傾向にある。塔からおろされる長い髪は、挿絵の題材に選択される頻度が高い。そうした中で、本考察では視覚では

なく聴覚に関する場面の重要性を指摘している。グリム兄弟による改編過程を分析したことで、類話には存在した視覚的な描写が削除されていることが明らかとなった。現段階では調査途中のため、『グリム童話』全体の傾向として結論付けることはできないが、加筆修正を通して口承性を再現する試みをグリム兄弟がおこなった可能性として捉えている。他の民話においても聴覚的な描写を残した傾向にあるとすれば、それは「語り」という形のないものを貴重なものとして後世へ残そうとした兄弟の意識的な行為であったことになる。

(6)今後の展望としては、民話を、語り手から聴く場合／文字を黙読する場合／音読する場合など、方法の違いによる理解のメカニズムの差異について考察する予定である。現在は、本格的には着手できていないため、今後の課題とする。この方向性に関しては2022年度に関連する論文にあたることができた。実験に関しては、現時点では目途は立っていない。

また調査の過程で、総合芸術としての人形劇において感情の伝え方の工夫を学ぶ機会を得た。このことから、描かれていない感情の表現方法とその読み方について分析したいと考えている。そのため、各種人形劇における人形の用い方と型を参考に考察を進める計画である。

5. 主な発表論文等

〔雑誌論文〕 計1件（うち査読付論文 1件 / うち国際共著 0件 / うちオープンアクセス 1件）

1. 著者名 鶴田 涼子	4. 巻 5
2. 論文標題 グリム・メルヒェン「ラプンツェル」における登場人物の発言と声の役割	5. 発行年 2023年
3. 雑誌名 明星大学全学共通教育研究紀要	6. 最初と最後の頁 17-30
掲載論文のDOI（デジタルオブジェクト識別子） なし	査読の有無 有
オープンアクセス オープンアクセスとしている（また、その予定である）	国際共著 -

〔学会発表〕 計1件（うち招待講演 0件 / うち国際学会 0件）

1. 発表者名 鶴田 涼子
2. 発表標題 グリム・メルヒェンにおける五感に関わる表現とその活用について
3. 学会等名 比較民俗学会
4. 発表年 2022年

〔図書〕 計0件

〔産業財産権〕

〔その他〕

-

6. 研究組織

氏名 （ローマ字氏名） （研究者番号）	所属研究機関・部局・職 （機関番号）	備考
---------------------------	-----------------------	----

7. 科研費を使用して開催した国際研究集会

〔国際研究集会〕 計0件

8. 本研究に関連して実施した国際共同研究の実施状況

共同研究相手国	相手方研究機関
---------	---------